

(研究ノート)

## 「野崎島の振興について」<sup>\*1</sup>

佐藤 快信<sup>\*2</sup>

The promotion of Nozaki-island<sup>\*1</sup>

Yoshinobu Sato<sup>\*2</sup>

### 目 次

はじめに

1. 野崎島の地域特性

1. 1 野崎島の地理・人口

1. 2 野崎島の自然資源の概要

1. 3 野崎島の遺跡・文化財

2. 「野崎島ワイルドパーク構想」

2. 1 野崎島ワイルドパーク構想

2. 2 フィールドミュージアムとして野崎島

2. 3 自然学塾村の現状と問題点

3. 野崎島の今後の展望

3. 1 野崎島の展望

3. 2 自然学塾村の今後の在り方

おわりに

keywords : 野崎島、フィールドミュージアム、  
地域資源

---

<sup>\*1</sup> Received October 30, 1998 <sup>\*2</sup> 長崎ウエスレヤン短期大学教養科助教授 Nagasaki Wesleyan Junior College, Isahaya, Nagasaki, Japan 854-0081

はじめに

長崎県は島と半島で成り立っている県といえ、全国的に島の過疎化が進むなか長崎県も例外ではなく、島の振興は長崎県において大きい意味を持つ。そうしたなかで、島の振興策として島外の大資本による観光開発がおこなわれることが多いなかで野崎島は外部資本を入れずに、「自然学塾村」を中心に自然体験の可能な場を提供していることにより振興をおこなっている。振興策として「自然学塾村」が開設（1990年）されて以来、施設の利用者数は延べ18,000人以上にのぼり、多くの利用者達が自然を満喫している。

しかし、「自然学塾村」も開設から10年が過ぎ、基本となる「野崎島ワイルド・パーク構想」も野崎島のおかれている状況も変化し、転換期を迎えている状況にあるといえよう。本報では、改めて

野崎島の今後の在り方について考えていきたい。

## 1. 野崎島の地域特性

### 1. 1 野崎島の地理・人口

野崎島は、長崎県五島列島の北部に位置し、小値賀町に属する大小17ある島の一つであり、西海国立公園の中でも特異な火山群島である。野崎島は周囲15.63km、面積7.36km<sup>2</sup>の島で小値賀本島の12.97km<sup>2</sup>に次いで2番目に広い。また、この島の形成は他の小値賀の島が小規模火山噴火によって形成された場合とは異なり、上五島の島々と同様に今から2～3万年前の中新世に起きた爆発的な火山活動によって形成されたものとされている。そのため、島の最高点は350mとなっており、小値賀町の中で最も高い。また、地層の大部分を構成するのは、新第三紀中新世初期～中期の五島層

表1. 面積及び海岸線延長（島しょ別）〔平成8年4月1日現在〕

（資料：総務課）

総面積 及び 海岸線延長	有 常 住 者 島								無 常 住 者 島										
	小計	小 値 賀 島	黒 島	斑 島	大 島	納 島	六 島	野 崎 島	小計	赤 島	藪 路 木 島	美 良 島	倉 島	平 島	宇 々 島	古 路 島	小 黒 島	ホ ゲ 島	乙 子 島
面積25.40 (km <sup>2</sup> )	23.56	12.97	0.20	1.61	0.71	0.60	0.69	6.78	1.84	0.59	0.47	0.25	0.13	0.12	0.09	0.07	0.05	0.04	0.03
延長97.80 (km)	75.8	35.3	3.2	5.6	7.8	5.2	3.1	15.6	22.0	4.5	3.7	2.9	2.2	2.7	2.1	1.3	1.1	0.8	0.7

表2. 集落別の人工増減の推移

（資料：総務課）

集落名	昭和35年		昭和40年		昭和45年		昭和50年		昭和55年		昭和60年		平成2年		平成7年	
	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数
	人	戸	人	戸	人	戸	人	戸	人	戸	人	戸	人	戸	人	戸
笛吹郷	3,931	856	3,488	847	3,017	825	2,644	785	2,423	779	2,238	766	2,069	737	1,913	726
浜津郷	749	134	670	141	573	122	496	118	465	121	420	118	398	114	352	108
柳郷	727	126	662	127	540	114	478	103	425	98	408	95	370	94	320	91
中村郷	443	83	497	102	387	93	310	79	299	87	258	77	255	77	226	84
前方郷	1,884	334	1,642	331	1,323	299	1,076	275	867	255	773	241	708	238	672	252
黒島郷	181	24	170	22	154	23	145	23	143	24	145	23	134	22	122	22
大島郷	254	45	224	41	184	41	175	42	167	41	133	38	116	35	115	38
斑島郷	779	171	755	167	733	176	658	181	576	170	500	159	432	155	385	149
納島郷	248	40	201	33	153	31	121	26	107	24	96	20	87	20	65	16
六島郷	262	38	227	35	184	39	149	38	126	34	106	29	68	22	56	18
野崎郷	645	120	466	84	257	61	122	35	86	31	24	9	14	6	12	6
藪路木島郷	173	29	124	22	47	9										
合計	10,276	2,005	9,126	1,952	7,552	1,833	6,374	1,705	5,684	1,664	5,101	1,575	4,651	1,520	4,238	1,510

群に属する地塁山地で、表層は熔結凝灰岩から成っており、約1万4千年前の地層と推定されている。

平成7年度の調査に依れば、住民登録者数は12名で皆50歳以上であり、世帯数は6戸となっており、平成10年現在で人口の増加はおきていない。住民は、1647年に18戸であったが、隠れキリシタンの移住により1887年に64戸に増えている。1960年には野崎地区62戸391人、船森地区29戸152人、野首地区22戸133人、計113戸676人であった。その後、船森地区と野首地区の住民の移転により、現在は野崎地区に在住しているのみとなっている。現在の住民は主に漁業を営んでおり、その他に自給用の畑作とハナシバ（墓に供える木）を小値賀島へ出荷することによって生計を維持している。生活は町営船（はまゆう3号）が1日2便小値賀島の笛吹港と野崎港を就航しているために、医療施設や売店がなくともある程度の生活水準を持って生活できる状況にはある。しかし、高齢者と後継者が島外に出ていることから、漁業のようなある程度の経験（住民の話では、5年程度）が必要な漁業の場合、現在の住民の代で消滅することになるだろうし、住民そのものが今後5年間で島外へ転出する可能性があり、無人島化する可能性が非常に高いといえる。

## 1. 2 野崎島の自然資源の概観

野崎島の森林は、イスノキなどを中心とする常緑広葉樹林でスダシイ、ヤブツバキ、ヤブニッケイ、クロキ、タブノキ、ヒサカキ、サンゴジュ、シキミなどの樹木で成り立っている。島の北側山には神島神社が有り、その周辺は自然林（原生林）が残っている。そこでは、樹の高さが20メートルぐらいのイスノキ、スダシイなどが在りし前のままの森林をみることができる。それ以外の林はほとんど二次林といわれるものであり、昔、住んでいた人たちが薪や炭を作るために、樹を切り出した後に成長した樹木からなっている。また、野崎港がある野崎部落の神社裏から自然学塾村に至る山道の片側は海岸まで急傾斜の斜面となっており、そこにはハマヒサカ、ヤブツバキ等からなる海岸林が形成されている。

自然学塾村周辺の浜辺では、ハマゴウの群落やコウボウムギ、ハマグルマ、ハマヒルガオなどが見られる。自然学塾村の前面は以前畑地だったことも有り、シバやススキの群落が見られる。自然学塾村を中心とした区域は、野生鹿の餌場となっており、木や草には鹿の“はみあと”が残っている。

野崎島では72種類の鳥類が観察されているが、一年中観察できる鳥は20種類ほどである。そのほとんどは長崎県内でごく普通に観察できる鳥であるが、珍しい鳥もいる。カラスバトはごく限られた島でしか観察できなくなり、国の天然記念物に指定されている。魚を餌にするタカの一種のミサゴが観察できる。この鳥は、きれいな海の側でしか生息しないといわれており、野崎島には非常に良い状態で自然が残っていることを示している。

野崎島の自然資源において、特筆すべきことは野生鹿が約700頭生息していることである。ニホンジカを6種類に区分した場合、野崎島に生息する野生鹿は、キュウシュウジカに属する。長崎県の同じ東シナ海にある対馬に生息する野生鹿のツツシマジカとは区別されている。キュウシュウジカの特徴は、オスに角が有り、毎年生え変わることで、後ろ足に中足腺があり、尻に尾鏡という白い斑紋があること。野崎島ではこれら野生鹿を目の前でみることができることに有る。かつては3つの集落に700人以上が住んでいたが、過疎化が進み2つの集落はなくなり、無人地帯が島全体に急激に広がったことと、昭和51年（1976年）から鳥獣保護区に指定されたことから、天敵もいないことも



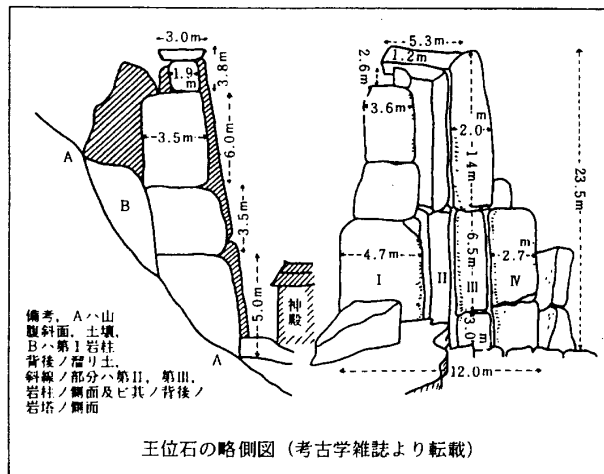
写真1. 畑跡と野性鹿

有り、それまで人目に触れることなくいたものが姿を見せるようになったといえる。特に、観察に良い場所は自然学塾村の周辺に餌場が有り、そこに集まってくるので、観察しやすい。また、自然学塾村の入り口には、鹿に対する配慮が注意書きとしてかかっている。

### 1. 3 野崎島の遺跡・文化財

小値賀島や野崎島の遺跡調査は、小値賀町教育委員会の塚原 博氏を中心におこなわれてきている。野崎島に関しては、1990年に野首遺跡の発掘調査がおこなわれており、野崎地区と野首地区に古代遺跡を確認している。野崎地区の遺跡では、現在の集落内に須恵器の散布が認められるのは、

図1 王位石略図



沖ノ神島神社の成立と発展を考察する上での貴重な資料といえる。また、野首地区の遺跡では並木式土器、滑石混入土器を再利用した有孔円板、石斧、石鏃、黒輝石などが出土している。

沖ノ神島神社の裏手に王位石（オエイシ）があり、数個の巨石を積み重ねた二つの柱の上に平石がのっており、舞台の様相を呈している。これは、ドルメンではないかという説もあるが、自然的に形成されたものか、人工物であるか未だに確定されていない。大きさは、高さ約24m、幅約12m、平石の広さ約5m x 3mというものである。神鳥神社の縁起によれば、第7次遣唐使派遣の2年後704年に神鳥神社の上宮として設けられたとしているが、古くから多くの人々の信仰を集めていた。そのため、古くから集落のあった野崎地区の住民

は、基本的に神道と仏教を信仰しており、隠れキリシタンの移住によってできた野首、船森地区の住民の信仰とは異なっている。



写真2. 野首天主堂

県文化財指定の野首天主堂は、教会建築で有名な鉄川与助によって設計、建築され、1908年に聖堂が完成している。天主堂は煉瓦造りの洋式建築物で、ステンドグラスもあった。住民の間には、建築の際、使用した煉瓦を野崎島の赤土を使って信者たちが焼いたという話しが残っているが、その確証は得られていない。野首地区には、西海岸近くの斜面の一角にはキリシタン墓地の跡が残されている。

## 2. 「野崎島ワイルド・パーク」構想

### 2. 1 野崎島ワイルド・パーク構想

1984年度（昭和59年度）野崎小中学校の廃校を機に、1986年（昭和61年）に野崎島の優れた自然を活かすための調査をおこない、「野崎島保全整備計画」が策定された。そして、島に生息する



写真3. 野崎島ワイルドパーク入口ゲート



写真4. 自然学塾村と野首天主堂

「シカ」を中心とした自然との触れ合いの場の整備を図る「野崎島ワイルドパーク」構想を打ち出し、県と町との共同事業として1986年度（昭和62年度）から整備を始めた。県営事業として、野営場、テント台座11基（66人収容）、シャワー室および便所1棟、炊事棟1棟、園路1,400mをおこなった。また、町営事業として、旧学校校舎を宿泊棟、学習棟、浴場、炊事場等を備えた自然学塾に改造（定員48人）、フェンス整備、野首天主堂改修をおこない、これら一連の施設は1988年（平成元年）に完成、同時に利用を開始した。

ところで、「野崎島ワイルドパーク」構想は、「過疎化の進行」、「野生鹿の問題」、「国立公園の保全と活用」という背景をもとに、島の主役である野生鹿の保護と活用対策、そして優れた自然環境を活かした施設の整備と利用を検討し、野生鹿の継続的研究と観光振興を軸に島の活性化を目指すものである。したがって、構想の基本的考え方としての目標は、①「過疎対策としての目標」、②「鹿の保全目標」、③「国立公園としての保全目標」の3つが設定されている。

#### ①「過疎化対策としての目標」

野崎島には野崎地区、野首地区、船森地区の3集落が存在し、昭和35年には120世帯645人を数えたが、昭和41年に船森地区、昭和46年に野首地区が集団移転のため廃村化し、現在では野崎地区の6世帯12人を残すのみとなった。こうした急激な過疎化は単に島から活力を奪うだけでなく島と島の周辺の管理を困難にしつつある。また、こうし

た環境の変化により鹿は生息数を増やし、島の植生や農作物に対しても被害を与えるようになった。そうした観点から、鹿及び島の自然を良好に保全するためには島に人が定住する必要がある。

#### ②「鹿の保全目標」

当初この計画は生息数の増加した野生鹿への対策として考えられたものであったが、直接的な野生鹿の駆除というのではなく、現在のように野生鹿を見ることが残していこうとすることが狙いである。しかし、野生鹿による植生の疲弊、裸地化、農作物への食害が進行している以上、ある程度の野生鹿を捕獲し、生息数を制限していくことも必要としている。

#### ③「国立公園としての保全目標」

野崎島は昭和57年11月に西海国立公園に編入され、野崎島の自然は現在も良好に保存されており、昔ながらの五島があるのは野崎島だけだと評する五島に住む人たちも多い。野崎島の保全としては、地質や植生、野生鹿だけでなく、人工的な部分を含めた自然の総体を維持することが望ましい。また、島全域を一律そうすべきだというのではなく、本体の自然に近いままある地区を主体に現状維持を旨として、あらゆる環境に可能な限り人の手は加えないことを原則として、自然の現状維持を原則とする地域、自然と人間との触れ合いを図る地域というように区域分側をおこなう必要がある。したがって、野崎島を公園として活用するにあたっては、独自の自然の中で非日常性の喚起という人々の感性に呼応するところに、野崎島の存在意味があると理解すべきであり、野生の公園という新しい公園像の追求が望まれる。

いずれにせよ、野生鹿が最も重要な自然要素として考え、それらへの影響を最低限に押さえつつ、人間が野生鹿に近づけられるようにすることの配慮が、公園計画上の大原則とされ、基本施策として、野生鹿の保全管理と施設整備計画にある。野生鹿の保全管理では、狩猟の制限や捕獲方法、調査研究の継続、その他の保護策を提示しており、施設整備計画は、まず住民生活の保全、発展につながるものでなければならぬとされている。総

合的な視点にたつて、島内のあらゆる可能性を再発見し、適切な投資により価値を高めるとともに、一方で世間の耳や目を野崎島に向かせることにより、荒廃の進行に一定の歯止めをかける必要がある。しかし、そのことで野崎島の資源価値を低下させぬよう、細心の注意を払いながらおこなうこととしている。

## 2. 2 フィールドミュージアムとしての野崎島

野崎島の地域資源としては、自然資源、歴史・文化資源といったものを想定できるが、なかでも野生鹿を自然資源の中核としてとらえることができる。

「野崎島ワイルドパーク構想」の策定に関わった片寄・山下氏の「五島列島・野崎島」を参考に見ると、イギリスのアカシカの研究基地として、また自然保護と観察、体験学習と青少年のレクリエーションの場として活用されているスコットランドのラム島のようなフィールドミュージアムのイメージを持っていた事が、推測される。

長崎県北有馬町の「北有馬フィールドミュージアム構想書」によれば、フィールドミュージアムとは以下のように定義されている。

科学技術庁資源調査会報告第109号によれば、「レクリエーション、自然体験・学習など、みどり資源（地球の生物圏を基にした、緑に象徴される植生や生物、それらが生息する土地、水辺、空間など指す）の多様で文化的な利用を促進し、みどり資源と人間との触れ合いを深めていくための施設、機能」であり、従来型の博物館（ミュージアム）が持つ機能である「物」の収集、保管、展示という「物からの学習」を原点に持ちながら、ごく身近でありふれた自然環境（フィールド）のなかで、自然、生活、産業を含めたあるがままを「物」としてとらえ、それとの触れ合いのなかで自然学習、あるいは、テーマの学習をおこなうといった方向づけがなされているものである。

フィールドミュージアムにおける展開では、「みどり資源の文化資源としての利用を進めるために必要なプログラム、指導員の配置、利用アク

セスなどの充実を図ること」であり、具体的には、①直接接触れる事ができる実物による体験・学習の重視、②体験・学習の基礎となる研究をおこなう部門の整備、③体験・学習の手助けをする説明員または学芸員の配置、④レクリエーション、遊びの要素の導入が必要となる機能としてあげられている。

したがって、フィールドミュージアムは、博物館という固定された建物施設のイメージのみにとられない広い野外を学習エリアとする新しいタイプの博物館であり、それによってみどり資源としての動植物や土地、水辺、空間、それらと共に現存する生活文化、地域の文化財である歴史的・文化的な遺産などは多様で優れた展示物、学習の対象や学習の場として重要な要素といえ、従来の博物館になかった「物と地域の環境・生活との結合」が発想の原点になっているといえよう。

構想を策定された際に、以上のようなものとして策定者たちがとらえていたかどうかは明確ではないが、構想策定者の一人の片寄氏は「五島列島・野崎島」のなかで「自然的人文的な環境のすべてをうまくインタープリート（解説、紹介）する仕組みができれば、現代人がレクリエーションと学習研究を通じて体験的に地球環境の明日を考える場に最もふさわしい場となることは確実である。」と記述していることから、北有馬の定義とはそれほど異なることはないだろう。また、自然学塾村開設期に管理人の山下氏が海洋標本の収集、野崎島の自然の手引書の作成などをおこない、フィールドミュージアムとしての整備をおこなおうとしていたことからもうかがえる。しかし、管理人の位置づけの問題や山下氏が野崎島を離れるなどにより、野生鹿の生態調査を残して現在ではその動きは止まっている。

## 2. 3 自然学塾村の現状と問題点

「野崎ワイルドパーク構想」の中核施設である自然学塾村の現状についてみると、利用者数は夏場を中心として、年平均約1,000人の入村者、約1,500人の宿泊者数となっており、その内訳は、町

表3. 自然学塾村の利用者数

	入 村 者 数						宿 泊 者 数			グルー プ数	利用者数 = A + B
	大 人		小 人		合 計		大人	小人	合計 (B)		
	人数	日帰り	人数	日帰り	人数	日帰り (A)					
1989	601		353		954	0	476	339	815		
1990	881	238	524	103	1,405	341	1,056	992	2,048	173	2,389
1991	977	594	688	192	1,665	486	1,083	978	2,061	178	2,547
1992	902	283	518	164	1,420	447	1,184	825	2,009	158	2,456
1993	932	267	640	166	1,572	433	1,056	1,035	2,091	134	2,524
1994	1,094	353	667	98	1,761	451	1,107	923	2,030	156	2,481
1995	743	241	531	126	1,274	367	779	587	1,366	123	1,733
1996	810	284	536	78	1,346	362	909	892	1,801	135	2,163
平均	868	280	557	132	1,425	412	956	821	1,778	151	2,328

※入村者数の人数には、日帰り者数を含む。

内利用者が16.3%、県内者が37.1%、県外者が43.6%となっている。特に、利用者のうち27.4%が福岡県からの利用者であった。

管理体制は、町水産商工課長—町商工観光係長—管理人—管理補助員で構成されている。ただし、管理人および管理補助員は7月と8月のみ配置して運営をおこなっており、その他の期間は町職員(課長・係長)で対応している。

自然学塾村でおこなわれている活動内容は基本的に入村者自ら企画したプランに基づき、自主的に自然の中での野生鹿観察、つり、磯遊びなどをおこなっている。管理者である町の商工観光課が企画しているものには、秋に渡り鳥の観察会がある。

自然学塾村に関する現状での問題点は、①利用者は夏季(7月、8月)に集中しており、他の季節利用との差が極端である。また、利用目的の内容からしても夏季に限定されているものとなり、周年利用がされていない。②利用目的は基本的に自然体験が中心であるが、個々のグループまたは個人が企画を立てておこなっており、学塾村の目的が明確に見出せないままになっている。さらに、学塾村利用者は一般の観光客も多い。③夏季には管理人1名、管理補助員2名が配置されるが、夏季以外の期間は商工観光係長1人の対応となり、スタッフ不足の感は否めない、ことがあげられよう。

### 3. 自然学塾村の今後の展望

#### 3.1 野崎島の展望

野崎島の今後は、3～5年で無人島になる可能性があり、Uターン、Iターンを募ることは、現状では非常に困難であるだけに、島の在り方を模索する困難さを示している。また、野崎ダムが野首地区に建設中であり、野生鹿の餌場の減少などもおきている。さらに、野生鹿自体も自然淘汰により減少しており、今後も緩やかな減少傾向は進むものと考えられている。

こうした背景のもと、野崎島の位置づけを、ふるさと自然体験型環境学習の拠点施設として確立させ、野生鹿の生態と植生の研究の場として位置づけられていくだろう。基本的には、「野崎島補全計画」に基づきながら、時代の流れに左右されない、自然の役割を明確にし、人手を余り入れない、子供中心とした展開が図れ、①森林の保全、②ビジターセンターの建設、③ダム周辺の緑化、公園化、④鹿の生息調査、⑤ワイルドパークの整備が進められていくだろう。

今後も野崎島が整備され、野生鹿の生態研究の拠点となっていくことは、意義がある。しかし、野崎島の無人島化を抜本的に解消するものではないことは明らかである。今後、野崎島を定住者のいる有人島とするのか、しないのかという議論はこれまでのところ明確にされてきていない。イギリスのラム島の場合、島の住民は環境関係の国家公務員とその家族で占められ、例外はほとんどなく、定年になれば島に在住することはできず、老

人のいない島でもある。そのため、定住の方策を現地では検討されている状況である。

「物と地域の環境・生活との結合」を原点とするフィールドミュージアムの路線を継承していくならば、そこに人々の生活がなければ成り立たないのではないかと思えるし、また、施設整備計画は、まず住民生活の保全、発展につながるものでなければならないとされていたことから、鹿からの防護柵が設置されたが、それ以上の発展は見出せていないようである。住民にとって、野崎島の施策が十分に活かされていないように見える。そういう意味では、フィールドミュージアムと似た概念をもつエコミュージアムの概念のほうが、住民参加型の地域振興としての面を持っており、野崎島にあったかもしれない。確かに、住民が少数で高齢者であり、今後島外に出てしまうかもしれない状況では、住民が主体となっておこなっていくことには限界があることも事実である。

### 3・3 自然学塾村の今後の在り方

野崎島の今までの振興策についてみてきたが、ここで今後の課題について整理してみたいと思う。課題は、住民が島外に出て無人島になる可能性があり、そうした状況のもとに自然学塾村のあり方をどう考えるか、となるであろう。

将来定住者を求めるか、どうかであるが、基本的には定住者がいる島を目指すべきだろう。野崎島の地域資源は豊富であり、それを活かすためにはそこに住む人々の生活との接点が必要であるからである。そのため、来るべき時がくるまでに、現在の生活文化を調査保存し、継承できる状況にしておく必要があるだろう。また、定住者のいない空白の時期があったとしても、小値賀町民にとって意味のあるものとして野崎島を位置づけることができるならば、それは少し容易になるかもしれない。このままでは、研究者と観光客だけに意味のある島となり、小値賀町民にとって意味がないものになってしまう可能性がある。

また、ハードを整備してもソフトに対応する体制ができていないことは、先に述べたことからわかる。学塾村独自のプログラムを設定できてい

ないことやそのソフトに関する専従のスタッフがないことは致命的である。確かに、自然体験の中核的施設としてのハードの位置づけはされているが、独自のプログラムを持たないことは、ソフトとしての位置づけが十分にできていないことを示しているように思える。

これらを解決する方策としては、野崎における自然環境は人間が生活する場であり、人間と自然が共生していく場であるということを明確にすることであろう。そして、専従のスタッフを自然学塾村に配置することである。その役割は、単に自然ガイドとしての位置づけではなく、野崎島の地域資源と生活文化とを関連付けられるような視点を持った研究者であることが必要である。「野崎島に野生の鹿が何頭生息しているか」という疑問に答えるだけでなく、「なぜ、野崎島に野生鹿がいるのか」、「住民生活との関係はどうであったのか」という疑問にも応える研究調査が必要である。そうした研究がなされてこそ、地域の文化資源としての野生鹿の意味も出てこよう。植物においても、生活の中でどう活用され、どのような価値を持っていたのかも資料として蓄積される必要がある。調査研究の視点は、野崎島の動植物（人間も含めて）がなぜここで生息し、存在するのかということをはっきりと示していかなければ、自然と人間との関わりについて考えることは難しい。環境教育をおこなうことにおいても、その視点は必要であろうし、子どもだけでなく、大人も利用できる環境を整えることも必要である。その意味では、自然学塾村は家族で利用されることを想定した施設整備、ソフトの開発が必要ではないだろうか。

### おわりに

長崎県小値賀町の属島のひとつである野崎島の概況をみてきたが、今後の野崎島をどうとらえていくかについては、野崎島の住民だけの問題でなく、小値賀町民全体の問題ともいえよう。野崎島を通してみてきたことは、地域文化・技術と地域資源がどのような関係を作ってきたのかという視点が地域づくりにおいて重要であることを再確認できたといえる。



## 謝 辞

本研究は、長崎ウエスレヤン短期大学地域総合研究所の1998年度共同事業の補助を受けておこなった。

## 参考文献

1. 小値賀町郷土誌、小値賀町教育委員会、1978年
2. 五島列島・野崎島、片寄俊秀、山下弘文、長崎出版文化協会、1992年
3. 北有馬フィールドミュージアム、北有馬町、1997年
4. 地域文化を生きる、浮田典良、大明堂、1997年
5. 内発的発展の道、守友裕一、農文協、1991年